

護衛騎士に恋愛相談したら豹変して朝まで種づけプレスえつちを
された話

窓を激しく叩く雨音が、田舎町の古びた宿の一室に響いていた。

領地の視察の帰り、急な雷雨のせいで馬車が立ち往生し、マリアは護衛の騎士、アルフレッドと共に近くの町の宿に駆け込んだ。
用意された部屋には、大きなサイズのベッドが中央にひとつ佇んでいるだけだった。

「……では、私は部屋の前で見張りをしています。何かあればすぐに呼んでください、マリア様。」

アルフレッドはいつも通りの硬質な、しかしどこか過保護な響きを帯びた声でそう言い、一礼して踵を返した。

切り揃えられた赤銅色の髪と琥珀色の瞳。その背中では、見上げるほどに大きくて逞しい。騎士団の中でも群を抜いた体軀を誇るアルフレッドには、ただ立っているだけでも圧倒的な存在感があった。けれど、自身の専属騎士であるアルフレッドに対して、マリアが恐怖を覚えたことなど一度もなかった。アルフレッドがその大きな身体と剣を、自分を傷つけるために使うはずがないと分かっているからだ。

「待つて、アルフレッド。」

ドアノブに手をかけたアルフレッドを、マリアは慌てて呼び止めた。

「廊下は冷えるし、風邪をひいてしまったら大変だわ。……それに、あなたに少し、相談したいことがあるの。」

「…相談、ですか？」

「ええ。あなたなら、部屋に入っても問題ないでしょう？ ほら、入って。」

マリアはなんの躊躇いもなく、アルフレッドを部屋へと招き入れた。ベッドの端に腰掛け、濡れた金色の髪をタオルで拭きながら、自分のすぐ近くを指差し、座るように促す。

アルフレッドは一瞬、彫刻のように硬直したが、小さく息を吐き出すと、音もなくマリアの数歩手前まで歩み寄り、静かに膝をついた。

見上げる形になってもなお、アルフレッドの広い肩幅と分厚い胸板は、マリアに無言の圧力を与える。しかし、マリアはその圧迫感に気づかないまま、旅鞆から取り出した一通の書面をベッドの上に広げた。

「実はお父様から、正式に縁談を勧められているの。王都の、由緒正しい伯爵家の方よ。我が家にとつて大きな後ろ盾になるわ。……お父様は、私が帰領したらすぐにでも受諾の返事を出そうとしているのだけど……」

マリアは、書面に記された見知らぬ男の名前を指先でなぞりながら、信頼する騎士の顔を宝石のような青い瞳で見つめた。

「あなたから見て、私はこの方と上手くやっていけると思う？ ずっと私の側にいてくれたあなたの意見なら、私、一番信じられるから。」

無防備な、純粹な信頼の笑みを浮かべて、マリアは言葉を紡ぐ。それが、どれほど残酷な言葉であるかも知らずに。

「……………」

アルフレッドは答えなかった。ただ、深く、深く頭を垂れている。

「……？アルフレッド？どうしたの？」

マリアは返事のないアルフレッドの様子を不思議に思い、首を傾げる。

マリアがアルフレッドの顔を覗き込もうとした瞬間、アルフレッドはカッリ、と床を鳴らして、立ち上がった。部屋の明かりがアルフレッドの大きな身体に遮られ、視界が一気に暗くなる。

「アルフレッ…」

マリアは最後までアルフレッドの名を呼ぶことができなかった。アルフレッドの大きな手が、ベッドの上の書面を容赦なく掴み取

り、床へと投げ捨てたからだ。

マリアは驚いて目を見開く。

「……上手くやっていけるか、ですか」

地を這うような低い声だった。いつもマリアに向けていた、優しい声音はどこにもない。

豹変したアルフレッドの雰囲気を感じて、マリアの背筋に初めて冷たいものが走った。

「アルフレッド、何を…」

身の危険を察したマリアがベッドの上を這うようにして後退りし

ようとした瞬間、凄まじい質量が視界を覆った。

「……っ!？」

押し潰される、と思った。

アルフレッドの大きな身体がマリアの上に覆い被さり、逃げ道を完全に塞いだのだ。反射的に、押し返そうと胸元に手を伸ばしたが、丸太のように太いアルフレッドの腕はびくともしない。

それどころか、マリアの両手首はアルフレッドの大きな掌であつさりと捕らえられ、頭上のマットレスに片手で乱暴に縫い止められた。

「……!？ 離して！アルフレッド！落ち着きなさい！こんなこと

はやめて！」

小柄なマリアは全身の力を振り絞って抵抗し、アルフレッドを正気に戻そうと必死に叫んだ。しかし、アルフレッドは真顔でマリアの手首を押さえつけたまま、動こうとしない。

「……落ち着いてなどいられませんよ、マリア様。」

アルフレッドは空いている方の手で、マリアの細い顎を強引に、上向かせた。

「お願い、アルフレッド……あなたはお父様も信頼する、私の騎士でしょう？ 頼むから、こんなことはやめてっ！ いつもの貴方に戻

つてよ…」

初めて向けられた剥き出しの男の気配と、低く冷え切った声音に、マリアの心臓が激しく跳ねる。

「…私が、これまでどんな気持ちで貴女の側にいたとお思いですか？ 貴女の髪に触れるときも、手を引くときも、指一本触れるだけで頭がおかしくなりそうだった。……それでも、貴女が私を異性として見てくださる日が来るまで、この想いが届くまで、決して手は出さないと誓ってきたのですよ。」

アルフレッドの顔が、唇が触れそうなほどに近づく。アルフレッドの熱い息が肌に触れるたび、マリアは恐怖と、経験したことのない

い奇妙な熱に身震いした。

「それなのに……何ですか、あの男は。どこの馬の骨とも知れない
見ず知らずの男との縁談を、何故私の目の前で、そんな無防備な顔
で相談するのですか。政治の道具として、男なら誰でもいいとでも
言うように……」

マリアの胸に罪悪感が染みのように広がっていく。アルフレッド
の言葉が本当なら、これまで、どれだけアルフレッドのことを無自
覚に傷つけてきたことだろう。

マリアはとにかくアルフレッドに謝りたいと思った。

「……っ！ごめんなさい、アルフレッド！私、貴方の気持ちに全然

気が付かなくて……ん、んんっ！」

突然のことだった。何か、熱く柔らかいものに口を塞がれた。

それがアルフレッドの唇だと気がついた時には、マリアの口の中にアルフレッドの舌が侵入してきていた。

アルフレッドは貪るように口づけを繰り返す。ただアルフレッドの為されるがままにされること。それだけが唯一の贖罪だ、とでもいうように。

「…っ、アルフ、んっ、んんッッ！」

アルフレッドの舌が小さなマリアの口の中で暴れ回る。齒列をなぞられた瞬間、ぞくりと背筋に甘い痺れが走った。

…ちゅ、…ちゅく…

音を立てながらマリアの口内を一通り味わったあと、アルフレッドがゆつくりと唇を離した。

「……はあつ…、はあつ…、アルフレッド、いい加減にしなさい！
貴方の気持ちに気が付かず貴方を傷つけたことは申し訳なかった
と思うわ。それでも私は貴方の気持ちに応えることはできないの！
私には家督を守る勤めがあるのだから。」

マリアは鋭い声でそう言いながらアルフレッドを睨みつけた。アルフレッドは口を拭い、口角を吊り上げる。

「こんな状況でもまだそんな口が聞けるなんて……それでこそ、私の愛するマリア様です。」

アルフレッドの顔のラインが薄闇の中に浮かんでいる。その彫刻のように整った美しさと、大人の色香を漂わせた表情にマリアは思わず息を呑んだ。

「今夜は貴女がどんなに泣いても叫んでも、貴女が私のものになるまで離してあげませんから……覚悟してください。」

アルフレッドは片手でマリアの手首を押さえつけたまま、もう片方の手でマリアの華奢な首筋を、熱を確かめるようにゆつくりと撫

で下ろす。

その指先が鎖骨をなぞり、マリアの真つ白なドレスの襟元を掴んだ。

「まずはドレスは脱ぎましょうか。…全て私に見せてください。」

アルフレッドはそう言つてマリアのドレスを丁寧な手つきで肩から引き下ろした。

「待つて！アルフレッド、ダメよ！」

アルフレッドはマリアの制止を聞かずに軽々とマリアの腰を持ち上げて脚からドレスを引き抜き、さらには肌着まで奪い取る。

「だめ…お願い、見ないで…」

マリアは一条纏わぬ姿にされて、恥ずかしさで顔を真っ赤にした。未婚の令嬢が、男の前で肌を晒すなどあつてはならないことだ。

しかし、アルフレッドはマリアか恥いる姿さえ、愛おしいというようにじつと見つめる。

「本当にお綺麗ですよ、マリア様。何も恥じることなどありません。

」

アルフレッドは低く、甘さを帯びた声でそう言った。

「……まずは、ここからでしょうか。」

アルフレッドの大きな手が、マリアの片方の胸を包んだ。アルフレッドの手は大きく、マリアの胸が片手の中にすっぽりと収まってしまう。

アルフレッドはその感触を確かめるように、軽くその膨らみを揉みしだいた。

「肌に吸い付くように柔らかいですね。頑固で意志の強いマリア様のものとは思えないほどです。」

アルフレッドは指の先でマリアの胸の先端を擦り始めた。

カリ、カリ……

「……………、……っ」

アルフレッドが胸の先端を擦るたびに腰にギュッと力が入ってしまふ。マリアは未知の感覚に翻弄されながら、なぜか漏れてしまいうるようになる声を抑え込んだ。

「マリア様、声を我慢する必要はありません。貴女が私に触れられて喜んでゐる証拠なのですから。さあ…可愛らしい声を聞かせてください。」

カリ…こす、すり、すり…

アルフレッドは触り方を変えながらしつこくマリアの胸の頂をいじり続ける。

（…何かしら、この感覚。ゾクゾクして、腰が動いて、声が出そうになるわ。）

「…ツ、…ツ」

マリアはそれでも声を抑えた。声を出せばアルフレッドを喜ばせてしまうと分かっているからだ。

「ほう…まだ声を我慢しますか。それならこれはどうです？」

アルフレッドは甘い笑みを浮かべると、ゆつくりと顔を伏せ、その熱い舌先を、マリアの胸の先端へと滑らせた。

レロ…

「ん、う……っ！」

突如として襲った未知の刺激に、マリアは思わず身をすくめた。

アルフレッドは、マリアの小さな突起を、濡れた舌先でしつこく転がし始めた。ピンと硬く尖っていくその場所をじつくりと熱く吸

い上げる。

レロ、レロ…、チュウウ…

（だめ…、変になりそう…！！嫌、なのに…）

「……っ、…う、…はああんっ！」

耐えきれずにマリアの口から甲高い声が漏れ出した。男性の前で、自分の口から情けない声を出してしまったことが恥ずかしくてマリアは泣きたい気分になった。

それでも、この慇懃無礼な騎士に涙を見られたくなくて、ぐつと堪える。

「嬉しいです。ようやく声を聞かせてくれましたね。」

アルフレッドはマリアの胸から口を離すと、満足げに微笑んだ。
マリアの胸の先はアルフレッドの唾液に濡れて、ぬらぬらと光っている。

「寂しそうにしている反対側も、同じように可愛がつてあげますね。」

「…アルフレッド、待って！もう、…あつ！」

次の瞬間、マリアのもう片方の胸の先端が、アルフレッドの熱い

口内に乱暴に吸い込まれた。

「ん、んうう、あつ、…ああんんっ！」

一度声を出してしまうと抑えられなかった。マリアの身体がベッドの上で大きく跳ねる。

アルフレッドは口に含んだその胸の真珠を、舌で転がし、時々軽く噛むように刺激する。微かな痛みと圧倒的な快楽が襲ってくる。

「あつ…、いつ、…ああッ！」

小柄な自分の身体が、大柄なアルフレッドの舌先に支配されていく悔しさに飲まれながら、それでもマリアの瞳の奥の真の強さは消

えない。

アルフレッドはマリアの瞳の中に消えない反抗心を見つけ出して、
楽しげに微笑む。

「まだそんな反抗的な目をされているんですね。では、少し趣向を
変えましょうか。」

アルフレッドは、マリアの細い両手首を固定していた力を不意に
緩めた。マリアはようやく解放されるのかと一瞬期待したが、その
希望はすぐに打ち砕かれた。

アルフレッドは手でマリアの腰を強引に掴み、軽々とその身体
を仰向けからうつ伏せへとひっくり返したのだ。

「な、にを……っ！」

シートに顔を押し付けられる形になったマリアは慌てて、膝をついて上半身を起こそうとするが、アルフレッドはそれを許さない。アルフレッドは背中にぴったりと身体を密着させて、マリアの上にのしかかった。

「くっ……、……あ、」

背中に男の硬い筋肉の重みと、熱を感じる。

小柄なマリアは、まるで獰猛な大型の肉食獣に完全に押し潰された獲物のようだった。

腕や脚を動かそうともがいても、アルフレッドの逞しい身体に阻まれ、動かすことができない。

「これで完全に動けませんね、マリア様。無防備にも男を部屋に招き入れ、押さえ込まれている気分はどうですか？」

耳元に、アルフレッドの低い声が響く。

その直後、アルフレッドはマリアの耳元にふーっつと熱く湿った吐息を吹きかけた。

「ひやつ……!?!」

初めて受ける奇妙な刺激にマリアの華奢な体がびくりと跳ね上が

る。

「ふふつ、素晴らしい反応ですね。」

アルフレッドの低い笑い声が、背中を通じて振動として伝わってくる。

「息を吹きかけただけで、そんなに身体を震わせるなんて……。必死に反応しないようにしていても、身体はもう私の触れ方を覚え始めているみたいですね。」

アルフレッドはそう囁くと、マリアの柔らかな耳たぶを唇で軽く挟み込んだ。

マリアが恐怖で息を止めた瞬間、アルフレッドの熱い舌先が、耳の外側の輪郭をじつくりと焦らすようになぞり始める。

ちゆく…、じゆる…

「ん、う、……っ……！」

思わずマリアは首をすくめたが、アルフレッドはマリアを器用に舌を動かし、耳の裏も舐め上げる。

耳の外側を責めた後、マリアの耳の穴の奥へ湿った舌先を入れた。

ジュク、ジュル…

「あ、あ……ッ！ んんッ！！」

「どこも敏感ですね。 マリア様。 本当に貴女は可愛らしいお方だ。」

アルフレッドは囁きながら、ぬるりと湿った舌をゆつくりと出し入れする。

マリアは声を上げまいと、きつく目を閉じてシーツに顔を埋める。だが、アルフレッドの責めは、耳元だけに留まらなかった。

アルフレッドの大きな右手が、マリアの細い脇腹へと滑り落ちる。熱い手のひらが、華奢な肋骨の輪郭をなぞり、くびれた腰の曲線をゆつくりとすうーつと愛撫しながら下っていく。

「ひあ……っ、……あぁっ！」

マリアはただ枕に顔を埋めて、耳と腰への刺激に耐えるしかなかった。

アルフレッドの手はマリアの腰からさらにするすると下つていき、シートとマリアのお腹の間の僅かな隙間に、入り込んできた。

「な、に……っ、あ……っ！？」

うつ伏せのまま、自分の身体の下でアルフレッドの手が蠢く感触にマリアは息を詰まらせる。

アルフレッドはマリアの下腹部を愛撫しながら、さらにその奥、マリアの秘められた場所へ指先を割り込ませた。

「そろそろここ…一番敏感な場所も可愛がつてあげましょうか。」

「…だめよ、そんなところ…！ ひゃああつ……！？」

マリアは悲鳴を上げた。アルフレッドの大きな指先が、マリアの小さな雌の突起を指先で弾いたからだ。

アルフレッドが一番敏感な場所と呼んだその場所は、確かにその通りで、少し触れられただけで、耐えられないほどの刺激をもたらす。

「アルフレッド……！やめなさい！そんなところ、触ったら……」

令嬢として誇り高く生きてきた自分が騎士に組み敷かれて、一番恥ずかしいところを弄られている。マリアのプライドは粉々になりそうだった。

アルフレッドはマリアの最後の抵抗心を削るように、ピン、ピンと悪戯のように蕾を弾いてくる。

決して他人には触れさせない場所を触れられて、強烈な甘い感覚に襲われている。マリアはその事実が目眩がするような恥ずかしさと屈辱を感じた。

「あ、ダメっ……！ はあ、っ、んん、んあッ！！」

「マリア様、ダメとおっしゃっている割には、そんな声を出されて……喜んでいらっしゃるようには聞こえませんよ。ほら、嫌ならもつときちゃんと抵抗してください。」

「ダメっ、って、言ってるのに！……あう、ああッ！」

執拗に足の付け根の辺りを責められて、マリアの身体には奇妙な変化が起きていた。足の付け根の排泄をする場所から、熱い液体のようなものが溢れ出しているのだ。

（……なんなの？ これは……どうして濡れてしまうの？）

経験も知識もないマリアだが、それがアルフレッドが続けている淫らな行為のせいだということはわかっていた。

マリアの考えていることを察したかのように、アルフレッドは自身の指先をマリアの目の前に持つてきて見せつける。

「…マリア様、見えますか？これはあなたが女性として、私に触れられて悦んでいる証拠ですよ。」

アルフレッドの指先は粘り気のあるマリアの蜜で濡れていた。マリアは認めたくなくて小さく首を振る。

「……！そんなはずないわっ！私があなたに触れられて喜ぶなん

てありえない！」

「そうですか、まだ認めないのですね。いいですよ、それならばもつと濡らして差し上げます。その方が、マリア様も後が楽ですから。」

「…やめなさい！そこ、おかしくなるの。」

「やめません。むしろ、もつとおかしくなっていただきたい。乱れた姿を私にだけ見せてください。」

「…ああっ、そこっ！」

自分の身体が熱を帯びていく感覚に、マリアは瞳を潤ませながら、顔を真っ赤に染めた。恥ずかしさと悔しさで頭がおかしくなりそう
だ。

マリアはふと、自分のお尻のあたりに何かが当たっていることに
気がついた。

(……………？何、これ……………？)

うつ伏せで押し潰されているマリアの、ちょうどお尻の割れ目の
あたり。

そこに、衣服越しでもはつきりとわかる、熱く硬い何かが、押し

当てられていることに気がついたのだ。

アルフレッドが身動きをわずかに変えるたび、その硬い塊が、マリアの腰やお尻を不躰に擦り上げてくる。

（嘘、でしょ……？　こんな、こんな大きなものが……っ）

その正体は何なのか、経験がないマリアでも本能的に理解できた。間違いない。アルフレッドの男性の象徴だ。

これまで見たこともない、自分を壊してしまいそうなほどに巨大な男の欲望がすぐそこに迫っている。指先の愛撫だけで脳が溶けそうなのに、これがもし、自分の身体の奥深くに突き立てられたら、一体どうなってしまうのか。

考えただけで恐怖と、微かな期待が湧いてきた。

「どうしました？ マリア様。そんなに怯えた顔をして…」

「……あ、アルフレッド、その、私の腰に当たってるのは…」

「ふふつ、マリア様もわかっておられるのではないですか？ 貴女様のような可愛らしい女性を前にすれば、男なら誰もがこうなってしまうでしょうね。」

アルフレッドはふつと笑い、マリアの背中に、自らの熱を押し付けるようにして体重をかけた。

マリアの逃げ場を完全に塞いだうえで、熱く膨張したモノをマリアの秘部に直接、ゆつくりと擦り付ける。

「ひあッ……あ、あああッ……!!」

アルフレッドの肉棒が擦り付けられた瞬間、痺れるような快感が走った。

アルフレッドが大きな腰をゆつくりと動かすたび、マリアの小さな雌の蕾はマリアの蜜を潤滑油にして、押し潰される。

ジュク…、ゴリッ…

「あああッ……!!……ああんッ!」

（うそでしょう……? なにこれ……っ! 気持ちいいはずがないの

に…！）

指よりもずっと硬く太いアルフレッドの肉棒。マリアが心の中で
どれだけ否定しようと、マリアの身体はどうしようもなく気持ちよ
くなっていた。

「ああっ！ んんッ！ あああッ！ ！」

「マリア様、抵抗するのはもうおやめになられたのですか？ ご自
分で擦り付けてきていますが…」

「ちがうの…！ ちが、っう、…の、に…！ うあッ！」

「何が違うのですか？こんなに蜜を垂らして、私を歓迎されようとなさっているではありませんか。」

「…だつて…アルフレッドが、…へんなことするからあ…」

「ふふつ、変なことつてどんなことですか？」

「…そんなの、言えるわけ、ないでしょ…んああああッ！」

ジユク…、チュク、…ジユクジユク！

狭い宿の部屋の中に、外の激しい雨音が遠のくほどに、卑猥な摩擦音とマリアの喘ぎ声が響く。

クチュ、ヌチュ：

「…ああんツ、…あんツ、…あつ、アルフレッド、もう、それやめて…もう、苦しいの。」

「…苦しいですか？ 私はもつと苦しかったですよ。ずっと大好きな人を前にして指一本触れないよう耐えてきたのですから。」

「……あう…、ああんツ！ それにしたって、こんなの、あんまりよ！」

「仕方ないでしょう？ 本当は貴女をこうして、欲望のままに可愛

がりたかつたのにずっと、ずっと我慢してきましたんです……この程度で終われるはずがないでしょう？」

「アルフレツ……はあ、ああッ！」

互いの極部を何度も擦り合わせる淫らな交わり。マリアは死んでしまふようなほど恥ずかしいのに、同時に気が狂いそうになる程の快楽を感じていた。

（もう……気持ち良すぎて、苦しいのに……アルフレッド、貴女はどれほど私をおかしくしたら、気が済むの……！）

マリアが荒い呼吸を繰り返しながら、最後の理性を失わないよう

に、耐え続けていると、アルフレッドは動きを止めてマリアの秘部に手を伸ばした。

アルフレッドはそこに触れ、十分に濡れていることを確かめてから言った。

「…指を入れますね。初めては痛みを伴いますから慣らしておかないと…」

「…ひっ！」

アルフレッドの節くれだった指がマリアの蜜壺の中に入ってくる。

ずぶぶ……

「あつ、いやッ！ なにか、入って…」

マリアは自分の内側でアルフレッドの指が動く奇妙な感覚に身を震わせた。

アルフレッドは慎重に、ゆつくりと指を進めていく。アルフレッドの長い指は容易くマリアの最奥まで届き、その感触を確かめるように軽く押す。

「中までしっかりと濡れていますね。…動かしますよ。」

「うぐつ、うう…」

クチュ、クチュ：

音を立てながらアルフレッドの指がマリアの狭い蜜肉の中を出入りする。

アルフレッドに押し潰されて身体を振ることすらできない状況の中、マリアは異物が蠢く感覚にただ耐えていた。しかしアルフレッドが奥の一点をぐつと押した瞬間、痺れるような快感が走り、思わず声を上げた。

「…ああッ！なにっ？アルフレッド、何して…」

「おや、もうナカでも感じていらっしやるんですか？本当に貴女

は覚えが早い。」

「知らない！ しらない、のに、そこはイヤなのッ！」

「心ではどれだけ否定されていても、身体はもうナカをかき乱される快感を覚え始めているみたいですよ。」

アルフレッドが弱いところをグツと押すたび、お尻のあたりに自然と力が入ってアルフレッドの指をぎゅううつと締め付けてしまう。マリアは自分の身体の主導権さえ、アルフレッドに奪われつつあることを悟った。

「そんなに締め付けて…もう指では足りないかもしれませんね…」

「…あ、そこお…いやなの……」

「離したくないと言われているみたいで嬉しいですよ。マリア様
」。

チュクク、ズチュ…

「…はあッ！うううッ、ああんッッ！」

マリアはもつと奥まで欲しいというようにぎゅう、ぎゅうと何度もアルフレッドの指を締め付けた。アルフレッドはそんな主人の様子を見て、もう十分だと判断したのか、指を引き抜いた。

「もう、準備は整ったようですね。」

アルフレッドは指を抜いてもなお収縮を繰り返すマリアを見下ろしながら、満足げにそう言うのと、マリアの身体を仰向けにひっくり返した。

マリアはアルフレッドにされるがままに、荒い呼吸を繰り返しながら、自分を蹂躪している騎士を見つめた。

「はあ…、はあ………」

アルフレッドはマリアの両脚を大きく広げさせ、その間に自身の

体軀を割り込ませた。

「…な、に…:…?」

マリアの視線が自然とアルフレッドの下半身へと向く。

そこにはマリアの腕ほどもある、巨大な男の象徴がそそり立っていた。

マリアの蜜で妖しく濡れ光るそれを見せつけられて、マリアはひっ！と小さく声を上げた。

「アルフレッドッ！無理よ、そんなの入るはずが…」

「無理ではないですよ。ゆっくり、深く深く貫いて差し上げます

。
」

「お願い……！本当に、それだけは……」

「マリア様、こんなに蜜を垂らして甘い声を上げているのに、今更逃げられると思わないでくださいね。これでマリア様の奥まで暴いて、完全に貴女を私のものにさせていただきます。」

アルフレッドはそう宣言すると、マリアの蜜孔に自身の熱をゆつくりと、しかし容赦なく押し当てた。